悠・遊・友、そして意宇
“志人道”を生きる

ゆう科学通信

Vol.10
Oct. 10月
2015年10月2日発行

発行：八雲志人館
〒690-2102
島根県松江市八雲町東岩坂3442-9
電話・FAX 0852-54-1023
E-mail／shijinkan@bell.ocn.ne.jp

一村一志

「夢の芽生える文化」創造のプラットホーム「八雲志人館」は、将来に向けて持続可能な地域を創出することをめざして活動します。

「悠久の河」意宇川紀行①

古代出雲の原点

松江市八雲町の天狗山の麓から流れ出た意宇川（いうがわ）は、周藤彌兵衛翁が開削した切り通しを過ぎると大きく東に折れ、中海に注ぎます。その下流一帯、松江市の南東部郊外に、意宇平野が広がっています。今は一面の水田ですが、ここは古代出雲の国づくりの原点であり、奈良時代には出雲国の中心部だったところです。

意宇の杜

◇意宇の杜

「ゆう科学通信」の創刊号で、八世紀に編纂された『出雲国風土記』の冒頭「意宇郡（おうのこおり）」の条にある「国引き神話」を紹介しました。これは『古事記』『日本書記』に出てこない、『出雲国風土記』独自の神話です。

「ヤツカミズオミズヌノミコト（八束水臣津野命）が新羅（朝鮮半島）、隠岐の島、越（北陸）から4つの土地を引いてきて島根半島を作った。国引きを終えたミコトが『意宇の杜（おうのもり）』に杖を突き立て『オエ（原文は意恵）』と叫んだので「意宇（おう）」という地名になった」と記されています。

そして、その結びに「ここにいう意宇の杜は、郡家（ぐうけ）の東北のほとり、田の中にある小さい丘がそれであって、周りが八歩（ほ）ばかりあり、その上に木が茂っている」と注が付けられています。

この神話に出てくる「意宇の杜」と伝えられる場所が、意宇平野のほぼ中央（所番地は松江市竹矢町494）に、今日まで残されているのです。

水田地帯を南北に貫く農道脇の田圃の一角に、木立を乗せた小さな丘があり、案内板が立てられています。丘の高さは1・2m、直径は6mほど。そこにタブの木はじめ10本ほどの樹木が茂っており、現在は「客の森」と呼ばれています。

出雲弁の「こぼっそらと（こじんまりと、ひっそりと）」という表現がしっくりくる風情ですが、それがかえって、何か濃密な力のようなものを伝えてくるように感じられます。

案内板には「八束水臣津野命が用いられた呪力を持った御杖の『より代（しろ）』がこのタブの木であり、古来『意宇のタブ』として近隣から広く崇拝されている」とあります。毎年、10月1日には祭りが営まれているとのことです。

地図を見ていただければわかりますが、意宇の杜の周辺では、農道やあぜ道が碁盤の目のように規則正しく整備されています。そこには、平野を東西にまっすぐに伸びる古代山陰道と隠岐国への道（島根半島の千酌浦（ちくみうら）＝松江市美保関町に通じる）が、水平、垂直に交差する「十字街（ちまた）」と呼ばれる十字路もあり、標柱が立っています。これらは古代条里制の地割りの名残です。

意宇の杜は、この条里制のための測量の基準点だったという説もあります。まさに「古代出雲の原点」といえるでしょう。

十字街

◇出雲国府跡

意宇の杜の南西、意宇平野の中央南端に、出雲国府跡（いずもこくふあと）があります。十字街からは300mほど南にあたり、すぐ傍を意宇川が流れています。

国府は、国を統治するため朝廷が諸国に赴任させた国司の役所です。国府の中枢が政庁で、その周囲の役所群を含めて国庁と呼び、さらにその周囲の市街区全体を国府と呼びます。今で言えば県庁や市役所などが集まった官庁街にあたります。

出雲国府跡と茶臼山

『出雲国風土記』に「神名樋野（かんなびぬ＝神がこもる山）」と記されている茶臼山（172m、松江市山代町）を北に仰ぐ、約41万㎡の広大な範囲に、政庁などの建物の柱の跡を示す杭が林立し、当時の溝が再現されています。

『風土記』によれば、意宇郡家（ぐうけ＝郡の役所）や黒田駅家（うまや＝公用の旅行・通信のための施設）、意宇軍団も同じ場所にあったとされています。意宇軍団は出雲三軍団の一つで、平常時1千人、非常時2千人の規模で、半分は騎兵といわれています。

この地は、飛鳥時代の終わりごろ（7世紀）から奈良、平安時代に至るまで、政治・交通・軍事の機能が集中した、まさに出雲国の中心地でした。

六所神社の「こくてう」の碑

出雲国庁跡は、『風土記』に「国庁、意宇郡家の北にある十字街に至り」との記述があることから、意宇平野内にあったことは知られていました。しかし、具体的にどこにあるのか諸説があって、長い間はっきりしませんでした。1962年（昭和37年）、郷土史家の恩田清氏が、現在の松江市大草町字竹ノ後（館の後の意味）が、江戸時代に書かれた「大草村検地帳」に字名「こくてう（こくちょう）」とあることを発見し、この場所を国庁跡と推定しました。

そして、1968年（昭和43年）から3年間にわたって発掘調査が行われ、現在の六所神社周辺であることが確認されました。縦横168mの国府域の半分が整備され、1971年（昭和46年）、国の史跡に指定されています。

発掘の際に、「大原評（こおり）」と記した木簡が出土しています。「評」は、701年（大宝元年）の大宝律令によって「郡」に移行する前の制度です。つまり、701年以前に出雲国府が存在したことを示しています。

国府跡で続けられている発掘調査

さらにさかのぼって、大和朝廷への服属である「国譲り」以前から、古代出雲の中心地であったかもしれません。ということは、古代日本の原点といえるのではないか、と想像の翼が広がります。

1999年（平成11年）から発掘調査が再開され、現在も続けられています。国府跡の草をそよがせて吹く風は、千数百年の悠久の時をはらみ、古代の薫りを今に伝えているようです。

交易場　修

「私の八月十五日」に寄せて

戦争の悲惨さを伝えていきたい

戦争の辛さ、残酷さ、苦しさは学校の教科書の写真、テレビでの映像でしか見て感じることしかできなかったのですが、今回、戦争を実際に経験された方々の体験談を聞かさせていただきました。

今までは、「大変だったんだろーなー」と、聞いただけになっていて、その後の行動を起こしておらず、人ごとの様にしか思っていなかったのですが、自分が同じ立場だったらと、現在の自分に置き換えて考える機会をいただきました。

戦争の時代で生きて行けたのか？　戦争の時代に自分なら何が出来たのか？　死と隣り合わせの状況で何を残せたのか？考えれば考えるほど、戦争中で制限されていた自由のない時代とは全く違う、自由の時代の中で生きる、自分の不甲斐なさ、甘え、心の弱さを感じました。

体験者の方は、忘れたいくらいの辛い体験を、目をつぶれば戦争時代の風景が浮かんでくるかのように事細かく、話していただきました。

改めて、命の大切さを感じ、このような戦争を二度と起こさないためにも、次の時代に戦争の悲惨さ、命の尊さと体験者の思いを伝えていく行動に移していきます。

三登　裕太
（島根県大田市仁摩町）

◇後記

「ゆう科学通信」は皆様からのご意見、情報を礎に発信していきます。

ご投稿はメール、ファクスでお願いいたします。